

第10回 『消された記憶』 (通算30回)

2005.7.21

前回、mental image(心像)というものについてお話をいたしました。

我々が物事を認識するという事は、その目の前の物事をあらかじめ用意されたイメージ(心像)に照らし合わせて判断を行っているということでした。私達はあらゆるものの判断を心像で行っているであり、基本的に例外というものはありません。そして重要なことは、心像は判断する前にインプットされたものであるということです。

AさんとBさんを例にあげましょう。

Aさん:「Bさんがあんな人だとは思わなかった」

この場合、BさんはAさんが抱いたイメージ(心像)とは違っていた人であるということ、なにもBさんがどうということではなくAさんの心像とは違っていたということが事実なわけです。

BさんはAさんのイメージに沿って人生を歩んでいるわけではないので、Aさんのリクエストに応じて何でも行うわけではなく「そう言われても…」ということになります。

ピンクのヒマワリを見たとします。「そんなバカな!」とどうして思うかと言うと、「ヒマワリは黄色」という心像が我々には用意されているからです。

人は好きな人ができるとその人のことを知りたくなります。何故かというとその人に関する心像を作りたいと思うようになるからです。心像がなければ判断する材料に欠くためコミュニケーションがとれないからです。

それでは心像はどのようにして我々に蓄積されるのでしょうか。それは外部からの情報により蓄えられるのです。外部からの情報にはいろいろあります。例えば、食べ物の味。どんな味かと問われても食べた事が無いものの味を表現できる人はいません。どうしてかといえばそれはその「味という心像」が用意されていないからです。見た事が無いものを絵に描いてくれ、といわれても同じ事。「きつとこんなふうなのは…」といって描く絵は近いと判断される別の心像から想像して描いているに過ぎません。私達は様々な経験から心像を蓄積し、物事を判断しているのです。

だとすると、知らない物事(すなわち心像のないもの)を我々は理解できないことになります。

そのとおり、情報のないものは判断の仕様もないのです。しかしその大事な情報が常に正確に均質に伝えられているなどという保障はありません。情報というものは何かの、誰かの都合に合わせて偏る方が普通といっても過言ではないはずです。

生薬についての心像もしかし、その情報が正確に均質に伝えられているとは限りません。

薬というものが商品としての側面を持つ以上、恣意的に選択された(あるいは修飾された)情報のみが抽出される事は想像に難くはありません(西洋薬についても同じことですね)。

今日は「補薬の主役」として扱われる人参を取り上げます。果たしてその心像は正しく我々の心に伝えられているのでしょうか。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日のkeyとなる生薬】

人 参

人参は神農本草経に「五臓を補う」と記されています。また、一般にいわゆる滋養強壮薬の代名詞のように扱われることが多くあり、それが故に不老長寿の妙薬として様々な「虚」を補う生薬というイメージから高値で取引され、また使用されてきました。

しかし、人参には種類があるのも事実です。そして使用される上でのそれぞれの主目的は異なっています。いわゆる虚を補うものとして用いられるべきものと、心下痞を除くものとして用いられるべきものは別のものであると認識することは、処方人参が配される目的および処方全体の意図を理解する上において重要なポイントです。

人参が配される処方は多くありますが、その配合目的は「気液不足を補うこと」と「心下痞を除くこと」に大別されることを理解することが重要です。以下ご紹介する処方の目的がどこにあり、故にどちらの人参を選択すべきかをお考えください。

【本日の内容について、ご確認ください】

人参湯：人参、蒼朮、乾姜、甘草

白虎加人参湯：石膏、知母、人参、粳米、甘草

炙甘草湯：炙甘草、人参、大棗、麦門冬、地黄、阿膠、麻子仁、桂枝、生姜

大建中湯：蜀椒、乾姜、人参、膠飴

四君子湯：人参、蒼朮、茯苓、甘草、(生姜、大棗)

半夏瀉心湯：黄連、黄芩、人参、半夏、乾姜、大棗、甘草

小柴胡湯：柴胡、黄芩、人参、半夏、生姜、大棗、甘草

麦門冬湯：麦門冬、甘草、粳米、大棗、半夏、人参

呉茱萸湯：呉茱萸、人参、生姜、大棗

黄連湯：黄連、人参、半夏、乾姜、桂枝、大棗、甘草

ポイント

■薬能と薬性

浅岡俊之

www.asaoka.org

今回からご参加の先生方へ

本日は生薬の薬能と薬性について取り上げます。

漢方処方に配合される生薬にはそれぞれ特有の薬能と薬性があります。そして1つの生薬に複数の薬能があることも珍しくはありません。また、同じ名前と呼ばれる生薬にも実は幾つかの種類があり、それぞれに異なる薬性を発揮するということもあるのです。

本日取り上げます人参には有名なものとして以下のような種類があります。

御種人参 (オタネニンジン)

味は甘く、人の形に似ていることからその名(人参)が付けられました。江戸幕府が諸藩に分け与えたことから御種とよばれるようになりましたが、その味からも理解できるように、いわゆる補薬として用いられることが主目的である種です。

紅参 (コウジン)

御種人参を圧力鍋で蒸し、乾燥させたものを言います。赤褐色になることからその名がありますが、御種人参よりさらに甘味が強くなります。

竹節人参 (チクセツニンジン)

味は苦く、竹の節のような形状をしていることからその名が付けられています。薬味からして明らかに御種人参とは別の意図で用いられるものであり、心下痞を取り除くことが本来の目的です。

いかがでしょうか。それぞれに特有の性質が認められるわけですから使用される目的によって使い分けられるべきであることは言うまでもありません。しかし、一般にこれらは「人参」という一言でひとくりに扱われ、正確に表現されることなく表記されてしまうことがあります。そうするとどうということになるか、結果としてそれぞれが配合される処方の全体の目的が誤って認識されるということになるのです。

各々の処方において配合される生薬には何らかの目的というものがあります。たとえ同じ名前の生薬であろうとも、その配合目的が別であることはままあることなのです。何故かと言えば生薬には複数の薬能が約束されている場合があるからです。